

くノ一淫闘帖

上巻 天正秘録編

二次元ドリームノベルズ/PDF立ち読み版

小説 綾守竜樹

挿絵 B-RIVER

卷ノ序

卷ノ一

落花無慘

卷ノ二

萎草悶舞

卷ノ三

渴根狂蕩

卷ノ四

淫芽応報

006

007

069

123

211

登場人物紹介

Characters



ともえ
巴

伊賀忍百地衆、「百花忍軍」に属すくノ一。棒手裏剣を得物とし、房術にも秀でる。忍軍を滅ぼした滝川らに対し、復讐を誓う。

あさみ
薮

伊賀忍百地衆、「百花忍軍」の頭領。万術に秀で、「蘭霧風」と恐れられる。柏原城での籠城戦の後、行方不明。

むしのび
蟲忍

伊賀忍服部衆。天正伊賀の乱まで、その存在が秘匿されていた。

とこよのむし
永憑之蟲

蟲忍が飼っている蚕。貴重な絹糸を紡ぎ出すらしい。

をスルスル、と引つ張り出した。演舞の仕草で解き、双花の咲きこぼれを導く。

「……おお、な、何と……美味そ……うな……」

まさに「こぼれる」と言ううしかない肉房の軋まるび様、それを真下から拝ませられたのだ。己の危地すらも失念させられたらしく、武士が嘆息を漏らしていた。

「美味そう、か……この期ごに及んでも、立場が分かってないようだな」

ハチのような括れ腰。鍛え抜かれた巴の腹は、うっすらと筋肉が割れている。肋骨の線も浮いて見えるほどの瘦身が、突然、二つの擬宝珠ぎぼうしゆを戴かいていた。まろやかそうな肉珠は、荒々しい鎖に食い込まれ、仏像の頭よろしく凸凹でこぼこに仕置し置けられている。人体というよりも何かの肉塊のようで、不自然に淫靡いんびだった。晒布せきふが解かれても、窮屈きうくつなのは変わらないらしく、貨幣大の乳暈にゅううんと金粒きんじゆほどの乳首にゅうしゆが、それぞれ明後日の方向を睨にらんでいた。

「お主は、我を女……隷従れいじゆんしか知らぬ者と蔑さげすんだが」

男の昂たかぶりを笑いながら、巴は鎖褌さかを解いた。金音を鳴らしつつ、封じていた尻しつと股また女体の神宮かむみやを晒さらす。腿あしの付け根ねに、うっすらと汗あせが浮ういている。

「左様に貶おとしめらるべきは、お主ら……男の方おとこのかたであろう。更に、我は女ではない……」

わずかばかりの股塞またづまは、桜色さくらいろに染められていた。巴はゆっくりと腰紐こしひもを解き、計はかったよ
うな仕草しざうで落おとした。

「……くノ一だ」



短冊形に切りそろえられた恥叢。柔らかそうな黒毛に囲まれた秘裂は、鮮やかな牡丹色だった。捌いたばかりの猪肉みたいに、艶かしく光っている。

「おお……」

男の応えを冷たく笑い、巴はゆっくり、と右手を下ろした。人差し指と中指で、肉ノ畝をそつと耕す。鋤入れられた秘園から、重みのありそうな匂いがこぼれ出た。

「……ここに、戻りたいか」

腰舞いを見せながら、巴は武士に跨った。左手で頬髭を撫で、右手で袴を切り裂いて六尺を解いてやる。はちきれそうな怒張の幹をつかみ、亀頭をあやしつ、

「戻りたかろう……ならば素直になることだ……」

その声に、妖しい韻律を込めていく。

「……そう。我の言うことを聞くのだ」

命じた瞬間、巴は男を呑み込んでいた。騎乗の位になって、蕩け顔を嘲う。

「おおつ、おおっ……な、なんと熱い……なんと……し、締めりじゃ……」

「気持ちよかろう……そう、委ねればよいのだ……」

言うなり接吻し、左手で男の鼻をつまんだ。呼吸を封じたまま、ゆっくりと腰を使い始める。むっちりとした美尻が、春の波打ちを真似ていた。粘膜と肉棒の擦れる音。妙に甲高いそれが、無人の深山にこだましてアオバズクたちを黙らせる。

巴はやがて、腰跳ねを激しくしていった。肩から背、足首から腿にかけての筋肉を思いつきり搾り、肉棒を擦りたてる。積年にわたる秘練により、巴は女穴のなかにまで氣脈を張り巡らせている。銜え込んだものの勘処を探り、襲の単位で愛撫しえたのである。

「つぐう、ぐぶふうーっ、うぶーっ、ぶふううっ」

口唇から呻きが、秘唇から白い濁りが垂れていく。武士は今や、ひっきりなしの射精に仕置かれていた。

——肉を覆すは操りの極み、主従を騷る始めなり。

薊様から口伝された、淫術の理法。

人の心身は五色六能、五つの色覚とそれを統べる能力によって営まれている。五色とは目・耳・鼻・口・肌、五官を通じた刺激のこと。六能とは視能・聴能・嗅能・触能・味能——色を得るための作法と、それらを統べる、即ち、器官を統べるための「官能」。

——色を溜めて能と為し、能をして斂めしむる。

人は普通、五能を満遍なく利かせているものである。しかし人は、外界の刺激と己の魂働き次第で、それらを集約させる刻限がある。そのとき人は、凡ての器官と切り離されていながらもそれらを操り得る能——官能に心身を委ねているのだ。

人は普通、五能を満遍なく利かせている。故に人を操るとなれば、五色五能、その凡てを奪わねばならぬ道理となる。だが、官能の渦期となれば別。その一点・その一瞬を奪う

だけで、凡てを一網打尽に為し得る。

巴の腰振りには、男の鼓動に合わせて加速していった。亀頭が抜ける寸前まで腰を振り上げ、そこで軽く「の」の字を描く。内腿の筋肉が、強靱そうでいながらも柔らかな蠢きを披露していた。肉茎を大きく旋回させてから、一気に腰を落とす。その刹那の間に、巴は逆さ「の」の字を描いていた。女壺のみならず腹筋や背筋までも、休むことなく働かせる。鎖帷子に封じられている双乳も、鉄網の押さえすらものともせず、艶かしい振り子を務めていた。

「百花淫術「棒傀儡」。窒息と絶頂に振られる、即ち、苦と悦に毀たれて色覚の許容を越えれば、人は官能に囚われる——つまりは、傀儡の性を露わにする。そこに言霊の仕掛けを注げば、

「……我に隷従することが、お主の悦びなのだ」
完了だ。

最後の噴射をそよ風のように受け流し、巴は男を睨みつけた。凄絶なるヨガリ声を轟かせながら、武士がその腰を、断末魔の如く跳ね踊らせている。ふてぶてしかった目はだらしなく濁り、志操を搾り尽くされたことを如実に訴えていた。

「擦られれば果て、果てれば蕩ける……男とは哀れなものよな」

滝川らの侵攻には、やはり秘命があつたのだ。木の枝から枝へと跳びながら、巴は思い返していた。

※

——絹のため、なのじや。

真の狙いは、世にも希なる貴蚕、

「永憑之蟲」を奪ること。

蚕、糸を紡ぐこの虫は、神とも崇められる存在である。質の高い糸を大量に吐き出す良蚕、それを手に入れる為ならば一軍を奔らせるも道理。

——農らが殿は、大殿様より東国……よき桑地を安堵された。養蚕を始めんとし召されたは当然。それに、あの絹を押さえられれば……京で威を振るっておる彼奴も、見返してやれよう。

「京の彼奴」とは、滝川と競っている側近衆のことだろう。此刻までは、その人物が伊賀と取引していたらしい。勿論、ここでの「伊賀」とは百地党ではなかった。残りの二軍、服部と藤林のどちらかだ。

この地に養蚕を伝えたのは、渡来人・秦河勝である。はた・はった・はったり——秦氏は、服部の遠い祖であつた。「服」の宛字も、無意ではないのだ。

——永憑之蟲を育てる奴らは、「蟲忍」と言つてな。ずっと匿われていたのじや。

彼らは人知れぬ山奥に閉じこめられ、同族だけで蚕と絹を護り伝えてきたらしい。巴が一投の下に殺した醜男。彼の者こそ、蟲忍の一人だった。

——では……あの女甲賀たちは、何だったのだ。

——あのくノ一どもは、「かいこ」じゃ。

武士は好色そうな笑みを浮かべた。

——……蚕は虫であろうが。

——蟲忍たちは、蚕のために「かいこ」を用いるのじゃ。

意味が分からなかった。傀儡技を効かせすぎたのだろうか。

——あやつらは「かいこ」じゃった……いや、「かいこ」に仕込まれたのじゃ。

——……何を施したのだ。

——「かいこ」の性を引き出したのじゃ。

要するに、彼奴らは女の手を借りて蚕を育てているのだろう。その際、手伝いの女たちに対して、何かの術を施すらしい。巴は蟲忍たちの隠れ里を聞き出し、そして喉から転び出そうだった問いを投げつけた。

——薊様も……其処に居られるのだな。

——呵々たる大笑。

——あのくノ一か。百地の鬼と恐れられていたそうじゃが、ふふふ……尻を掘られるの

が好きだ、と哭……。

巴は男の喉笛を裂いた。声を紡ぐ肉膜が、魚の臓物のように飛び出した。

※

蟲忍の隠れ里に至る道は一つ、南深山の東端にある洞窟だった。巴はその、苔生した暗がりの前で深呼吸していた。

(……鹿眠苔の護りか)

里までは特殊な頭巾を被って往復するらしい。だが、巴は水練だった。己の肺腑を信じ、やたらと滑る道に駆け込む。心ノ臓が悲鳴を上げ始めたとき、光の壁。待ち伏せに充分備え、一気に飛び出た。手近な巨石の陰に滑り込み、待ち望んだ空気を吸う。胸をはちきれさせんばかりに溜めた刹那、

(味がある……)

独特の匂いを嗅ぎ取っていた。甘いような臭いような、昂ぶらされそうな恥ずかしくなりそう——曰く言い難い、しかし馴染みのあるものだった。何の匂いだろう。

さりげなく辺りを窺う。四方を崖に囲まれた、井戸底みtainな盆地だった。かなり狭い。百地の大屋敷のなかに、すっぽりと収まってしまふ規模だ。薄暗く、空気が湿り、あえかに流れる風すら澱んでいる。

この日照では仕方もあるまいが、桑畑は貧弱そのものだった。所々に、粗末な家屋。蚕小屋であろうそれらは、腐った木板に黴だらけの屋根藁を被っている。餌桑の貧弱さとい、設け屋の崩れぶりとい、

(養蚕に適した地とは思えぬが……)

訝しんでいると、女の悲鳴が聞こえてきた。手前から二番目、割とましな小屋。何かの目印のように、幟が立っている。巴はしかし、それらを検分するより先に、

(……薊様の声だっ)

地を蹴っていた。クナイで小枝を切り裂きながら駆け、小屋の壁に背を寄せる。そばの水瓶にも、独特の匂いが溜まっていた。

風穴から、家のなかを覗く——二人の小男と、一人の女。藍染めの忍服たちと、一糸まとわぬ裸形が、曲線的にもつれあっている。

(……ああ……生きて……生きておられたのだ)

巴の胸に、狂おしいくらい安堵が流れていった。喉の奥から、甘酸っぱい吐息が込み上げてくる。そのままへたり込み、人目も憚らずに嬉し泣きしたかった。

(薊様……薊さま……薊さまっ……)

だが、再会の喜びに浸っている暇はなかった。薊様は生まれたままの姿に引ん剥かれ、高手小手に縛られ、その上で四つん這いにさせられているのだ。両膝と頬の三点だけで姿

勢を支えた、あまりにも屈辱的な格好を強いられている。

(……ど、どうなされたのだ……薊様が何故、そのような……真似を……)

格好を強いられている、と思つたのだが。

趣が、違ふ。薊様は自ら、物欲しげにお尻を突き出されていた。艶やかな双臀に、股塞の線がくつきり、と残されている。どうやら、かなり日焼けなさつたらしい。

色分けされているその美尻を、小男たちがヌチャヌチャ、と舐め回している。巴から見て奥に立っている男は、異常に長い舌を持っていた。尻たぶのまろみを舌で掬い上げ、舌腹を蠢かして揉み立てている。

「ひいつ、いい……いいですう……」

危うく、クナイを取り落とすところだった。

(あ、薊様が……ど、どうして……こんな……)

媚びきつた声音。相手に取り入ろう、可愛がつてもらおうとしている口調。

「ほうか。そろそろ尻い、掘られとうなつたやろ」

「はい、はい……ほ、掘ってください……」

薊様の応えが早い、手前に立っている小男が二色の尻をつかみ、腰に密着させた。泥のなかに杭を突き立てる音。続いて火のような喘ぎがほとばしり、屋内を燃やす。

「……はあああ、はああんっ、あっ、はああーんっ」

灼かれた空気が、急に生臭くなった。それを嗅ぎ取り、巴は、この地に満ちている異臭の正体を悟っていた。女の泣きじゃくりが似合う匂い——女蜜のそれだ。

「ほれ、後ろのお仁ひとに、お礼言わなアカンやろお」

奥の蟲忍が、薊様の髪をつかんで引つ張り回す。

「あーっ、は、はひいっ……あーっ、あり、がっ」

手前の小男が、腰を回し始めた。何か言いかけた薊様が、ひとたまりもなく悶絶され、鳥肌も露わにお乱れになる。

「ほれほれ、ちゃんと言わなア……前はなしやでえ」

「……ああつ、嫌ですつ、それは堪忍かんにんしてえつ」

切羽詰まった慟哭。薊様がむりやり、「ありがとう」を捻り出そうとした瞬間せつな、男の掘りが突貫になった。意味のない呻きをこぼされつつ、頭領だった御方が吠えられる。尻を掲げ、背を斜めにした痴態。己の美肉を覆され、傀儡に墮とされたその御姿は、あまりにも淫ら、あまりにも哀れで、

「……薊様っ」

見ていられなかった。巴は叫んで、壁を蹴り破った。蹴り足を下ろしたときには、既に棒手裏剣を投げつけていた。女尻の支配者だった小男を、あっさりと針山に変える。

投げの手を下ろすと同時、巴は左足を振り上げて回し蹴りを放った。針山は絶命してい

たらしく、毬まりの如く吹つ飛んでいく。

(……弱い)

呆氣ない。蟲忍と思われる小男たちは、まさに虫ケラのようなだった。弱い上に頭も回らぬらしく、残った一人は襲撃されているにもかかわらず、オロオロと突つ立つたままである。得物えものを取るなり仲間を呼ぶなり、処さねばならぬ策はいくらでもあるだろうに。

「何刻いっかつでも殺れる」——巴は、そう判じた。なれば、人質を救うのが先だ。縛りの繩を切り、葉か何かを嗅がされたのであろう薊あざ様を背に隠す。

「百が一花・巴です……お助けに参りました」

久闊きうかんを叙す暇もなく、棒手裏劍を支度した。未だ呆ぼけ面の蟲忍から、色々と訊き出さねばならぬ。傀儡くわいに導く秘壺ひろうめがけ、投なげんとした折。

首筋に打撃。誰にやられたのか、考えるまでもなかった。

「……あ、あざ……み……さ、ま……」

視界が揺れる。薊あざ様の手刀が突いてきたのは、巴も狙おうとしていた処ところだった。腰が抜け、首が据わらなくなった。闇に蝕まれていく魂の片隅に、哀しげな声が降ってきた。

「許して……未だ、事成るに至っていないのです」

※

目覚めは、藁わらの肌触りを運んできた。

二丈四方の藁小屋。驚くほど天井が高かった。四隅よすみで燃えている炬火かがりびが、灯りと熱と、いがらっぽい匂いを振り撒まいている。

「……われ、巴と言うんやつてな」

薙はげを賜たまっていた声。巴は弾かれたように、トンボ返りを決めた。しならせた内腿うちももに、涼気が当たる——括くわ袴はかまを脱はがされていた。腰の軽さや胸の揺れ具合からして、鎖くわ褌はかまや晒ひ布ふも奪うばられているようだ。

着地の衝撃を受けた際、股の奥から違和感が込み上げてきて、片膝をついてしまった。気絶している間に、あちこち弄もくられたらしい。

だが。

妙なことに、武装は残されているのである。籠手・脚絆・鉢鉄、それに手細も着せられたままだ。籠手を掲げて護りと為しながら、巴は飛びかかる機を窺うかがっていた。

「おっとお、いきなし手荒なマネはヤメといてや」

一丈ほど向こうの蟲忍。小男は皺だらけの唇を開き、乱杭らんか菌きんを見せつけてきた。

「いきなし寝首ねくびかかれたんやから、巴はんが混乱こんらんするんも無理ないけどなア……ココはま
ず、お話ししたいんや。そないに気色けしきばまんとしてや」

「……………」

「巴はんかて、知りたいやろ……薊が何で、あないな裏切りい施したんか」

巴は一瞬、息を詰まらせた。表情を押し隠したつもりだったが、その瞳には動揺が浮かび上がっていた。薊様。巴にとつては、天照あまてらすにも等しい御方。

「薊はのう、儂らの『飼娘』になつとるんよ」

「……かいこ、だと」

茶筌髻が話していた、謎の言葉。

「字い当てれば飼うに娘や」

「飼う娘」あるいは「飼われる娘」だろうか。

「ココまで来たんやから、儂らの事情……ぼちぼち知つとるんやろ。儂らはア、特別な蚕はんを飼つとる。そのお世話のために、女も用立てとるんや」

そう語られた瞬間。

項に震えが走った。巴は急に、小用を足したくなっていた——否、なつたように錯さくしていた。下腹部に、いかかわしい熱が籠もり始めたのである。

「後でちゃんんと、蚕はんのご尊顔、拝ませたるけどなア……儂らの神様は、桑だけを食うとるんやない。『永憑之蟲』はんが馳走ちそうなられるんは」

下卑た笑いの後、

「女の愛蜜や」

巴は悟られぬように足幅を狭め、股間をそろり、と閉ざした。

「永憑はんは、女の下っ腹んなかに潜つて、蜜を飲み食いされるんや。食いつばぐれると困るさかい、蜜う滴らせるためのコツを……よう知られとるんやでえ。せやからな、女陰んなか潜られた女は……もお、ヨガりまくりや」

「……………」

「口から泡ア噴いて、精い果てさせ続けるんよ……ほんまに凄いんやでえ。女つてのは、あないに夜叉狂えるんかア、と……その食欲さに、空恐ろしゅうなるわい」

濁り目の視線が、巴の双脚を舐め回してくる。「おまえも同じや」と訴えたげな、無言の嘲り。

「何や、そないに睨み返さんといてや。ほんでもな、女たちに蚕はんを銜え込んでもらうまで……そこまでがワヤなんよ。ほれ、何せ……相手え虫はんやからなア」

——青白い幼虫に股座を這い回られ、胎内を穿り回される。

(何と、おぞましい……)

巴は、頭のなかを満たした想に戦慄き、

「……おんや、どないしたんや。儂の話い、聞いとるんか」

腰裏を迫り上がってくる熱に、淫慄かされていた。

「どうもしておらぬ……早く、続ける……」

熱い。まるで、囲炉裏を跨いでいるようだ。真つ赤な熾火の上で、厠座りを強いられる気分。揺らめく炎の舌に、内腿を、股間を舐め回されている。

「ほうか……そこでな、儂らは蚕はんを、別の種に繋いでいったんよ。そないして作った別の虫……『壺憑之蟲』と言うとるがな、それを予め、女の子壺に埋めておくことにしたんや。壺憑はんを吞まされた女たちを……『飼娘』と呼んどるんよ」

巴は、両目を見開いていた。

「そうや、巴はん」

ひよこひよこ、と近づいてきて、

「あんたもや……エエ顔色になつとるのう。どや、キとるやろ。足の裏に疼き、走つとるやろ。喉お、渴いとるやろ。耳の後ろ……くひひ、ちいりちいり痺れとるやろ」

「……………」

「壺憑はんはなア、毎日毎日い、ある刻限になると餌ア求めて……毒を垂らすんや。餌アもらえんと次第にい、濃ゆいの流すようなる……得心しなはつたようやなア」

熱い。腰の裏が火照っていた。熱い。股座が焦げてしまひそうだ。熱い。秘め溝が熱くてたまらない。

「その毒が、狂わせてくれるんよ。飼娘たちが極太なんを欲しゆうなつて、腰い振り始めたところで……永憑はんをけしかける、つちゆう仕儀や」

カエルじみた眼が、巴の股塞に凝りついている。油のようにネットリとした視線が、女壺の炎を煽り立てていた。

「どの女も悦んで……くひひ、掘ってもらいたがるんやでえ。貫いとくれ、掻き回してくんはなはれえ、つて……身も世もなく泣き喚くんや。勿論、蜜う流させるんが狙いなんやさかい、永憑はんにエグリ抜かれても……壺憑はんの毒吐きは、終わらへんけどな」

甲賀くノ一たちの末路が、頭に浮かんだ。

「……餌とは……お主らの精か」

「ほ、鋭いやんか……そうや、儂らの子種汁こそ、壺憑はんの馳走なんや。永憑はんが満腹になられたら、儂らが改めて、飼娘どもを愛でてやるんよ」

「……………」

「さんざ獅子吼った後やからなア、どの飼娘も、ちつとの撫でで悶絶しよる。鼻息かけるだけで果てまくりや。いったい幾度昇り詰めとるんか……勘定うしきれたことあらへん」

浮き上がりそうになる奥歯を噛みながら、巴は小さく呻いた。内腿に脇下、腕裏に頭皮折り畳まれている、あるいは毛に護られている部分に、粘っこいひきつれが走っている。

「いつまでも終わらん惑乱、とどまることを知らん昇天……果てても詰めても狂つても、肉の極楽にして心の淫獄から……くひひ、逃れられへんのや。七日も経てば……どんなに強情な女も、儂らの情けを求めて……涎垂らしながら這い蹲るようになるんやでえ」

額には玉の汗、こめかみには血の筋。巴は、足指で草履の底を掻きむしっていた。

「女に生まれたことを後悔……いや、感謝かもしれないへんなア……くひひ、女っちゆう性に憑かれたんを嘔み締めながら、儂らの草鞋わらじいナめるようになるんや……精が欲しい、注いで欲しい、そう哭きながらなア」

何と下劣な絡繰りだろう。

無限の狂楽にして無間の拷問。この卑劣漢どもに肉棒あてがを宛つてもらい、ドロドロの白濁を注いでもらえぬ限り、嫌でも発情させられ、かつ、ヨガリ狂わせられる。

(……くノ一は……つ、痛苦なら忍びぎれる……)

だが、快楽は。

心身の蕩ける境地となれば。

女としての本分を狙い穿たれれば。

「……っあ」

肉欲の昂ぶりとは、生きとし生ける輩やからの根っこに立つ理ことわりだ。どれだけ足搔あがいても落とせない、永久の憑物つきものである。

(あ、薊あざみ様も……こ、これを……)

甲賀のくノ一たちが、此奴らの傀儡に躡られてしまった所以わけ——巴は、心のなかで頷い

ていた。此刻いまなら。味わわされている此刻なら、理解できる。

子壺が、際限なく唸り続けていた。下っ腹と腰裏が、互いに競っているみたいにヒクついている。視界が白み、頭のなかまで霞に犯されてしまいそうだった。

「おう、エエ面構えや……くひひ、耐えとるなア」

「……んむっ……んっ、く……」

「そうそう。簡単に色ボケてまう女は、飼娘に相応ふさわしゆうないんや。何度天に昇っても構わんほど頑健で……悦びにシゴき抜かれても正気い保てるほど気丈で……更にい、儂らの犬馬を務められるほど有能でなければアカン。巴はんたちは、まさに格好の飼娘や」

「……っく、ふ……ざけおって……」

寒気が押し寄せてきたかの如く、巴は震えながら首をすくめた。たつぷりとした髪穂が揺れ、炬火の照りを受けては黒と金に交錯する。

「……お主らの……げ、外道術など……っくあ」

動いたせいだろうか。ぶわっ、と全身が膨らんだようだった。なかんずく胸と腰、女のまるみが軒昂かがになつていいる。巴は呻きつつ、軀を軽く屈めた。初めてだった。これまでも度々、邪魔だと罵つてきたが、これほど切実に悩まされた験なましはなかった。

(ち、乳が……お……重……い……)

重い。己の一部であるのに、異物じみた重さがあった。脈拍に合わせ、それがズシリ、

と響いてくる。ふくらみの上で四股を踏まれているかのよう。粘り気のある震えは、鎖骨の芯まで響いてきた。腰の疼きも厄介だが、双娘たちのそれは痣になるのではないかとすら思えてくる。

(感じるな……乱されるなつ)

鎖の冷たさ・忍服のごわつき・股塞の密着。被服の締めつけや摩擦ごときに、情欲を掻き立てられるなどありえぬ。そのような恥辱、あつてはならぬ。

「外道ねえ……そない言うなら、正攻法でいこか」

蟲忍は笑い、巴に向かつて何か投げてきた。約一尺の黒鉄、巴愛用のクナイである。

「持ちいや。ほんで、と……やーやーやー、儂は桑太、服部宗家に仕えし忍なりい」

往古の戦よろしく名乗つて、桑太とやは懐に手を入れた。巴と同寸、一尺ほどの得物を取り出す。羽箒。十枚の鷹羽をスラしながら重ね、根茎を束ねて竹に差したものである。使い込まれているらしく、艶々と黒光りしていた。

「巴はんはクナイ、儂はこれが得物や……これなア、蚕はんの棲む籠から蚕沙、つまり、蚕はんの糞を払うために使うんや。蚕はんごと掃くさかい、その玉の御肌を傷つけんよう、たアんとナメしてあるんよ。これで撫ぜられるんは……くひひ、気持ちエエでえ」

皆まで聞かず、巴は屈んでクナイをつかんだ。立ち上がろうとした刹那、

「……くあつ」

鎖に乳首を弾かれて、へたり込んでしまう。胸の尖端から裾野に向けて、煮立てた乳蜜が逆戻りしているようだった。妖しい、あまりにも妖しい甘み。血流の有り様を、鮮やかに思い描けそうだ。

「おんや、まだ一合わせもしたらんになア」

「……手合わせ……だ……と」

「そうや、巴はんと儂の仕合いや。正々堂々、一對一の真剣勝負やでえ」

「……な、にがっ、せっ、正せ……い堂ど」

「巴はんが勝つたら、儂らの秘密を知ったことも、仲間を殺したことも……目エつぶつた。このまま黙って出でて……薊を連れてつてもエエ」

「……………」

「実はな、儂の他にも……まアだ仰山、居とるんやでエ」

巴は慌てて、立ち上がった。湯気じみた吐息。心身を騙して、何とか構えを取る。両の膝が、奥歯の根が、内腿の脈が笑っていた。

「だからア、心配せんでエエて。そいつらには手出し、させへんよ……そらア、総がかりで押さえつけて」

「くっ」

「大勢で寄って集って……くひひ、ヨガリ死んでまうまで、こつてりと折檻したいトコや

けど……儂ら、外道とちやうさかいなア」

「我に……虫を植え……た、んだろ……うが……」

「それが儂らの術や。巴はんやつて……随分と無体なマネえ、するそうやんか」

「……………」

「それに儂らかて、何が何でもイワしとるワケやないで……永憑はんは神さまや。それに捧げる飼娘なんやからア、縁えんじいうモンも、大事にい考えとる」

「勝手に、情を焚たきつけておいて……何をぬかす……」

「……巴はんの口から、そないな文句ぶんぐう言われるとは、思わんかったなア」

蟲忍は、上目遣いで笑った。

「するつてえとアレか、くノ一だろうが何だろうが……女むすめいうんは畢竟ひつきよう、カラダを焚たきつけられてもうたらお終しまい、つてえワケなんか」

「……………」

「それやつたら、元より淫らの性せいにい憑よかれとる、つてことやろ……壺憑ひつぽうはんを仕込むんは、単ただにい近道きんどうするだけのことやないか」

「……ふざけるなっ」

「おーおー、何ともコワイ顔かほしなはるなア……まあ確かにい、さつきのは言い過ぎやな。どないな聖人さまかて、メシめしい喰くわなア死ぬ。人には限界げんがいい、いうモンがあるからなア」

桑太はへらへら、と手を振り、

「せやからな……儂ら、媚毒の効き目にも限りい、設けとるんよ。腹んなかアの壺蟲はんは、十四日しか生きられへん。その間、儂らの子種汁うガマンできるんやつたら……それで終わりってワケや」

恐らく。蟲忍たちの精液のなかには、壺憑之蟲の「卵」も仕込まれているのだろう。疼きを癒すための解毒剤が、新たな呪縛に成るわけだ。

(……十日と少しで……解かれるのか)

巴の心に希望が灯る。約半月にわたって色欲しきよくに悩まされるぐらい、一ヶ月にわたって食欲さくに苛まれた験しと比べれば、まだ耐えられるはずだ。かなり堪えてはいるものの、この程度で治まってくれるのなら、何とか凌ぎ切れるはず。

「どうや、そないに無体な仕儀いでもないやろ……まあ、虫はんも飢えてくんやから、次第に命懸けの毒う、垂らしてくるようなるけどな」

ぼそりと付け加えられた一言が、巴の背筋に冷たい汗を生じさせた。

(……こ、狡猾なっ)

次第に、濃くなっていく——いったい、どれほど強烈になるのだろう。此刻でさえ、統べていた心身の脈を麻幹おがらの束みたいに乱され、熱のたぎるままに翻弄されかけているのだ。これが初日、第一段め。あと十三段も昇らねばならぬ。

「ま、それも儂に勝つてからやけどな……ほな始めよか」

桑太が、物見遊山ものみゆざんのような足取りで近づいてくる。

「くっ……」

痙攣けいれんし始めている躰に、巴は必死で呼びかけた。感じるな、乱れるな。相手は惰弱で卑劣な雑兵。どうしようもない下衆だ、片手片足で戦っても勝てる奴なのだ。

クナイを握りしめる。狙うは首筋。軽く撫ぜる、それでケリがつく。一步の踏み込みと右手の一振り、それだけで終わるはず。

「……く、くうっ……」

なのに動けなかった、動くのが恐かった。動けば、あられもない叫びほとほしを迸らせてしまっただった。ヘビとカエルの主従関係みたいに、桑太と巴は睨み合っていた。

「どないしたんや。討ち入って来たときみたいな天狗舞てんぐまい……見せてくれへんのかア」

「……っ、くうう」

「ほしたら、こつちから攻めよかなア」

飼あじやいネコでも戯しているように、桑太がのそり、と羽箒はぶらを突き出してきた。

(……斬り落とす)

ためらいの呪縛を振りきり、巴は凄絶な決意と共にクナイを繰くった。その刹那、右乳の

下半球を手細の裏地に擦りあげられる。しつとりと腫れた肉房は、ザラつく布のおざなりな研磨にも、

「……ひあつ」

落雷じみた刺激を味わっていた。首筋が浮き上がり、目の端が吊りかける。クナイを取り落ときなかつただけでも、上出来だった。唇をわななかせながら、巴はヨロヨロと後じさる。その足運びは、天狗どころか桑太よりも鈍かった。

「くひひ、エエ声やなア。凜としているクセにい、妙なモロさも忍び込んだる……まるで、折られるのを待つとる氷柱みたいや」

羽箒が、太腿を撫で上げてくる。産毛が逆立つような震えに襲われつつも、巴はクナイを振った。肌が擦れぬよう氣遣ったせいも、刃の軌跡はあまりに鈍い。

「おつとつと、激しい攻撃や……おんやア、股塞が濡れとるやんか。萌葱色が濃緑になつとるでえ」

桑太は下卑た笑いを上げ、背後に回り込んでくる。肩で息していた巴は、その蝸牛じみた所作にも対応しきれなかつた。背を奪られ、項をしゆるり、と掃き撫ぜられる。

(くうううつ……なつ、何で……こんなつ……)

羽の感触。柔らかなのにコシが、繊細なのに威力がある。くすぐったさの陰に獐猛な粘つこさが潜んでいて、女の勘にねつとりと絡みついてくるのだ。魔性の一撫ぜは、巴の矜

持を塵埃ホコリの如く払い落としていた。

「……ふあつ……げつ、下衆め……え……」

慌てて、背後に横薙ぎを入れる。だが「薙ぐ」と言うもおおこがましい、子ネコの手招きじみた拳措きよそにしか成らなかつた。

「おお、恐いのう……くわばらくわばらや」

羽箒を舞わしては、桑太は含み笑いしながら逃げていく。屏風びやうぶ絵の仕上げをしている絵師のように、一筆入れては離れ、遠くから吟味してはまた、一筆を浴びせてくるのだ。責めては離れ、離れては責め——それを繰り返す。

「……つぶ、ふあ……くふああ……げ、ゲス……めえ……」

少しずつ。

さわりさわりと。

真綿で磨き上げるように。

羽箒の摩擦も、溜まりに溜まれば名刀を折ろう。微かすかな悦びも、重ねに重ねれば——猛たけき芯すら溶かすだろう。巴は今や、生汗にまみれていた。汗を吸った手細が肌に貼りつき、控え目な束縛を為してくる。その中途半端な不自由さも、巴の肌を妖しく悩ませ、更なる昂ぶりを煽っていた。

(こ、このままでは……籠城と……同じ……)

追い詰められた巴は、乾坤けんこんを放ることに決めた。ゆっくりと後退し、壁に向かう。

「なんや謀ろうしとるんか。そうや、もつと……くひひ、もつと抗つてなア」

桑太が、やや素早めに飛びかかってきた。巴は半身に回転し、桑太の飛び込みを避けて壁に衝突させる。肌の狂乱は、唇を噛んで掻き消した。「しもたっ」という醜い声。そこから向かって、巴はクナイを突き出した。刺すというより倒れ込む要領で、体当たりを喰くらわせようとした途端、

「……ふうあああ」

此刻になって、思い当たった。

(……わ、我は……桜色の股塞を……つけていたはず……)

なのに先程、桑太はこう嘲つてこなかったか。

——萌葱色もそうしきが濃緑に。

巴は思わず、目を瞑つむっていた。桑太へ向かって倒れ込むはずだったのに、その場で膝砕けになりかけている。発芽はつがしかけの脱力感を呑み込もうと、空しくも切実な努力を重ねた。

「あああ、くっ……く、食い……こ、んで……」

下着を、替えられていたのだ——巴が激しい動きを採った瞬間、股塞が勝手に振むれ、一本の縄に変貌していた。編まれたヘビは潤んでいる割れ目に雪崩なだれ、襜たもとの狭間に潜り入って、意あるが如く締めつけてくる。陰毛を擦り立てられる感触。羽箒よりも荒々しい刺激

が、股座を狂乱させていた。

「ふいー、壁と牀で挟むハラやっただんか……成る程なア、それやったら、力ア込めて振らんでもエエもんなア」

「……うあ……く、くあああ」

「やれやれ、二重に仕掛けといて助かったわい。薙もそうやっただが、百地のくノ一いうんは、ほんに強いのお。じゃが、それだけに……」

桑太は笑いながら向き直り、

「……狂わすんが愉しいわア」

左乳を鷲づかんできた。

「ふああっ」

巴は選択に迫られた——振り払って逃げるか、それとも、このまま刺そうとするか。

瞬またたきの後、決断した。我はくノ一、隷従の性など振り捨てたる者也。鬨をカチカチ鳴らしながらも、弛緩している右腕を利かそうと試みる。

「くひひ、たふたぶや……儂てのひらの掌てのひらに余るわい」

巴の剣呑げんおんな動きを気にもせず、桑太はただ、胸房をこね続けてきた。外から内へえぐり込むように、掌で押し上げては指先で下ろすように。指の付け根を荒々しく埋めてきたかと思えば、指の腹を優しく滑らせてくる。乳の勘処よわみを知り抜いた、巧みな手戯だった。

「……んあつ、く……んむつ……んう……」

震えてしまう。淫術を修めたはずの己が、乳を揉まれただけで泣きそうになっていた。それでも肩に力を込め、クナイの切っ先を急所に運ばんとする。

「おう、指に吸いついてきよる……なかなか感じとるみたいやなア」

「……だつ、誰が……ゲ、ゲスの……手でなど……」

「ほうか、そりゃ堪忍や……巴はんつたら、そないに息い荒げとるしい……くひひ、耳たぶまでえ真つ赤にしとるもんやから」

「……くうう……だ、黙れ……」

「てつきりい、ビンビンにキてるんやと思つとつたわ。失礼なこと言つてもうたなア」

白々しい当てこすりに、自尊心を削られる——桑太の言う通りなのだ。クナイを持ち上げる過程で、巴は何度も何度も、乳から雪崩れてくる悦びに邪魔されていた。構えようとしていた肘を、呆気なく頰くすおれさせていたのである。

刃を桑太に押し当てるまで、どれだけ空しい屈伸を繰り返しただろう。ほとんど動いていないのだが、息切れするほど疲労していた。

「ほう……こないに揉みしだかれとんのに」

むにゆつ、もみつ、むによ、ぐにゆつ。

「構えられたんか。くひひ、大したもんやなア。ほんまに……」



ぶれる手先を固め、巴が何とか、クナイの尻に体重を乗せようとした刹那。

「……ご苦労さんや」

こりっ、と妙に柔らかな音がした。

「……………っ」

実際には、何も鳴ってなどいなかっただろう。だが、巴の女肉は聞き取っていた。否、聞かされていた。口のなかで舌を跳ねらせてしまうほど、その音に痺れていた。

「……あ、あ……あああ……」

左乳の尖端を捻られたのだ——によつきり、と屹立きりりつした乳首は、忍服越しでもあからさまだった。桑太の無骨な指に摘まれ、ワラビ採りの手捌きで挫こき倒されている。

「どうしたア、ほれ……」

裏地の毛羽にくるまれて、桑太の指で捻り回される。細やかな荒つぽさと不躰かいらぼねすぎる力強さが、もつとも前方に突き出している部分から逆り、肩胛骨かいらぼねを突き抜けた。

「……ほれ、ブスッと来んかい、ほうれ」

くりっ、くりくりっ、ぐりっ。

「あっ、あっあっあっ、ああっ」

カクン、と膝が碎けた。

「どうしたんや、汗みずくやないかア……ほいよっ、と」

躰を入れ替えられ、巴の方が壁に押しつけられてしまふ。背を凭もたれさせた中腰の姿勢。忍服をはだけられ、乳の膨隆ぶりを晒さらされていた。鎖帷子の鉄網から、柔肉が爆はぜんばかりの勢いではみ出る。昂ぶりきつた痴態は、熟しすぎのキイチゴも赤面させそうだった。

「くひひ、キレイに拭き取つたるからなア」

羽箒で、敏さびくなつた果実を撫なぜ回される。下から上、水墨画で樹の幹を描こうとしているような仕草。入念な掃き上げが、下卑た笑いと共に繰り返された。乳の付け根から舐め上がっていく都度つど、タカの羽はその重みを受けてしなやかにお辞儀し、弾力を溜めつつ乳暈のそばをかすめていく。真つ赤な肉芽を越え、昇り坂から降り坂に切り替わる瞬間、羽箒は勢いよく弾け戻り、乳肌を摩ますり上げた。

羽に舐められた部位が一瞬だけ白く変わり、薄皮を剥がれたモモになる。巴はその度に頤おどがを跳ねあげ、前髪をたゆたわせた。脇腹をくねらせ、艶かしい曲線をさらす。

「……あああ……む、胸は……やめ……ろ」

おかしい。涙の膜を浮かべながら、巴は函軋りしていた。乳をさすり回されているだけなのに。ただ、それだけなのに。

「ほうか、お乳が気持ちエエんか」

「ちっ……っう、ち、ちがう……」

口ではなく手を動かせ——胸の奥で叱咤した。拘束されているわけでも、負傷している

わけでもない。クナイを握りしめた右腕、それを振り上げればよいのだ。それだけで、彼の嘲笑など浴びずに済むのだ。

「巴はんつたら、慎み深いなア。そないな可愛い娘には……ほうれ」

羽箒の繰り方が変わった。右乳の付け根に沿って、下弦を描きつつ谷間を遡ると一転、左乳の膨らみ始めに沿って、上弦を描きつつ乳脇を降りてくる。そのまま左乳の付け根まで繋げ、下弦を描きつつ谷間を遡る。

「やっ、やめ……っ、付け根に、さっ、さわる……なあっ」

左右に並べられた楕円。双乳を、交互に縁取られていた。途切れることのない羽舐めは、巴の忍耐力をカンナのように摩滅してくる。タマネギみたいに、少しずつ剥き出されていく感じ。いやらしくつけられている緩急にも、胸と腰を痺れさせられる。何よりも、乳肉の裏地——普段は決して弄られることのない陰部。そこを下心だけの優しさであやされるのが、辛抱堪らなかつた。こめかみが白熱し、目尻が決壊しそうになる。

「ほなら、こつちの方がエエんかなア」

縁取りの軌跡が、ゆっくりと狭まり始めた。付け根を刮がれることで湧き出す、あの焦燥感——首を振り乱したくなるような狂おしさが、次第に和らいでいく。

だが、それに安堵して居られたのも一瞬のことだった。乳房じゅうに散っていた快感が、羽箒に追い立てられ始めたのだ。麓から頂きに向かつて、肌と肉の隙間を甘やかに忍び上

がってくる。

(こ……このまま、迫り上がってきたら……)

あの獯猛な狂おしさが、たった二カ所に纏められてしまう。そこにも勿論、羽箒の追い討ちが下されるだろう。

「なんや、何ぞ応える余裕もないんか」

「……………」

そうなったら、どうなるのだろう。己は、どんなふうにならぬだろうか。いつの間にか、全身の気脈が胸の頂きを凝視していた。「乳首を責められる」と思うだけで、眉間の奥が白濁する。引き気味の腰をよろめかせながら、桑太の右手を見詰め続けた。あと一周すれば、踏み越える、という段になって、

「そないに黙りされると……寂しいなア」

桑太は突然、左手を動かしてきたのだ。

「うあつ、あーっ」

べつとりと濡れそぼった股塞。桑太は腰紐との交点をつかみ、縄と化しているそれを引き上げてきた。恥叢があずき磨きじみた音を鳴らし、秘肉がぬちつ、と泣き喚く。

「あーっ、あああ、ああーっ……裂かつ、さつ……裂かれえ……」

ガクンガクン、と膝震えが繰り返された。桑太が股縄を引き上げる都度、巴の腰は落魄

していく。半ば捲れ返った肉唇から、泡ぶくの浮いた粘液が滴り落ち、内腿を濡らしていた。湿っぽい匂いも、ますます濃やかになっていく。

(こ、堪えろっ……堪え、ろ……)

尻餅をついたら、反撃が出来なくなる。分かっている。戦いの猛者として、それはよく分かっているのに力が入らないのだ。じよりっ・ぬちっ、と股座を鳴らされる度に全身の関節が啜り泣き、謝罪を漏らしつつ脱力していった。

「そうそう。そないに騒いでくれんと、面白くないからなァ……ほんではそろそろ、ココお弄ったろうかなァ」

盃よろしく盛り上がっている乳暈。その周りを、鷹の羽がくすぐってきた。

「だ、駄目っ……そっ……そ、そこは……」

「ほう……ココは何なんや」

「……そっ、そこ……そこは……」

——分からない。

そんなわけがない。そこは乳首だ、胸の尖端にある器官、授乳の嘴にして男の気をそそぐ提灯だ。子と男にとって、他人にとって働くものであり、己にとっては何でもないもの。女にとって、致命的な働きかけを為すものではないし、ましてや我にとって、「女」を捨てた者にとって、そこが全身を操ることなどあり得ない、あるはずがない。

なのに、此刻。

そこはこんなな——ああ、こんなにも敏くなっている。

「どしたア、応えてみい」

そこが乳首なら。真に乳首であるなら、こんなに成っているはずがない。我を切なくさせたりするはずがない。何だ、いったい何に成ってしまったのだ。

「……そ、そっ……そ、こっ……はあ……」

くノ一だから。

心身を統べ抜いてきたから。

肉の乱れを味わったことがなかったから。

だからこそ、本当に初めて直面する恐怖。躰を思うように操れぬ、心を意のままに保てぬ。普通の女にとっては何でもない肉酔狂——乳首の昂ぶりが、巴にとっては魔性の呪に感じられるのだ。どうなってしまうのか、どうされてしまうのか分からない。

「くひひ……ほうか、ココが弱いんか」

右乳の尖端。麓の色境から頂きの切れ込みまでを、蚕の歩みで撫で上げられた。

「あーっ」

捲られる。

「ああっ、あーっ、あああーっ」

捲り返されている——柔らかな擦り上げが、乳房の気脈をベロリ、と裏返してくる。巴は初めて、心の底から翻弄された。透いた叫び声に、クナイを取り落とす音が被さる。

「どうや……此刻までは、己が悦ぶ前に相手の男お、イワしてきたんやろうけど」

仰け反った白喉を舐め上げつつ、桑太が交互に、左右の尖りを掃いてくる。羽が弾力を披露する都度、巴の艶腰も、階段を降りているみたいに沈んでいった。

「巴はん、ホントはかなり脆いほうやでえ。ココも勘処やけど、こないに乱れる女はそう居らん。普通はこっちや」

廁座りまで沈んだところで、桑太は巴の両膝を押し広げ、己の腰を割り込ませてきた。ぐちょ濡れの股塞をずらし、包皮から飛び出していた肉莖——姫ノ根を撫ぜ上げてくる。

「あ……………っ」

どさっ、と鈍い音を立て、巴は尻餅をついていた。喉を引きつらせたまま、顎をガクガク震わせる。目尻から涙があふれ、頬を伝って顎の震えで振り飛ばされていった。

「おろ、もう果ててもうたんか」

嘲りながら、桑太がのしかかっていた。仰向けに寝かされ、腹の下に組み敷かれてしまう。むっとするほどの体臭が、滝のように押し寄せてきた。

「……あ……あ……っあ、あう、うう……だ、誰……があっ」

屈辱だった。巴は常に、上に跨ってきた。ヨガっている男を、その呆けた鼻の下を、冷

たい目で見下ろしてきたのに。

「げ、ゲス…のっ、て、手でっ…な、など…」

「ほお、まアだ忍んでたんか…：そうよなア、お乳ナデナデぐらいで果ててもうたら、百花の名が泣くモンなア」

桑太は当てこすりながら、その左手を巴の口に突っ込んできた。指先で唇の裏を探り、舌を挟んでくる。

「熱いのう。躰んなかア紅蓮ぐれんに燃え切つとるんやろ。そないに強情張らんと…：あたっ」
指から血。桑太の濁り血が巴の唾液と混じりつつ、錆さびの臭いを溢あふれさせてくる。

「あたた、ほんに活いきがエエわい…：儂の指い、噛み千切ろういうんか」

口調とは裏腹に、桑太は楽しげだった。再び右手を働かせ、淫らのタカを舞わせてくる。左の乳ちくび嘴くちびに対し、羽を立てての撫ぜ擦り。

「あ…：あーっ、ふあああーっ」

かてて加えて、右乳に顔を乗せてきた。ごわつく髭で胸の統ぬめはだ肌をまさぐり、団子っ鼻で鎖帷子をずらしてくる。網の罫いから乳ノ芽を脱走させると、

「なら、儂も食べさせてもらうわい」

房ごとカップポリ、と頬張ってきた。冷たくてカタい鎖網越しの、温くてヌメらかな粘膜包み。その場で足踏みしたくなるほど、ねっぷりと舐めしやぶられる。

「あーっ……だ、駄目っ、ああっ、だめ……」

どちらの膨らみも鎖帷子によって捕縛されているため、揺らしたり振ったりして、責めから逃してやることも出来なかつた。羽と舌、ナヨつきとヌラつきの切れ端たちから、散々にいびり抜かれる。

「くひひ、喘いでばっかりやな。もう嘔んでこんのかア」

「……あああ、あっ……つく……うああーっ」

「こないにデカイクセして、ホンマにお乳が泣き処なんやなア」

「あああ……ちっ、ちが……」

舐り責めねぶに続いて、頬の筋肉で揉みたてられる。

「……あああーっ」

唇のカサつき・口腔のヌメリ・吐息の湿り気。すべてが、堪らない。巴あばらは肋あばらを上あ下ささせ、髪穂をのたくらせた。腹筋も浮き沈みを繰り返し、臍を泳がせている。

「だめっ……あああ、そっ、それ……ああっ、だめえ」

桑太は更に、前歯の裏を乳首の背に当て、トウモロコシを食べるかの如く押さえてきた。そしてウシじみた舌を乳裾に当て、妙なる蠢きでしごき上げてくる。舌に觸られる前から、乳首が歯の裏に押しつけられて、

「は、はじっ……あああ、はっ、弾かれて……るっ……」

加えて乳首まで達すれば、舌と歯で挟み潰されるのである。巴が桑太に仕掛けようとしていた罫を、それは矮小化したような淫戯だった。

「あーっ、乳首っ、ちっ、ちくびいっ」

認められない、断じて認められるはずがない。己はこれまで、厳しい修練に耐えてきた——どんな務めもどんな責め苦も、忍の一字で耐えてきたのだ。その己が辛抱できない色覚なんて、あるわけがない。たった二点から迸ってくるものに押し流されるなんて、あるはずがない——そんなのは許されない。

だが、巴は我知らず、乳房を突き出すように仰け反っていた。もはや、桑太に噛みつくどころではなかった。乳房の激震に、躰をまるごと乗っ取られている。

(だ、駄目っ、なっ、流されてはっ、だめ……)

虫酸^{むしず}が走るほどの情弱者から、恥辱を施されているのに。それも前戯を施されているだけなのに——キュンッ、と胃の底を搾られる心地。止まらぬ、止められぬ。

魂と心身の狭間に、ヌメる巨壁が迫り出してきた。くノ一に戻ろうと、巴が魂を昂ぶらせるほど、その壁がヌルッと弾き返してくる。剩^{あまつさ}え弾いた分だけ、心身を望まぬ向きへと突き上げてくるのだ。徒労を繰り返すにつれ、巴の忍耐も剥がれていった。鍛錬の末にまとった心の鎧まで、ドロリと溶かされていく。代わりに込み上げてきたのは、

無力感。

三字の強さが屈伏し、一字の弱みに組み敷かれていく。百花は初めて、落花無惨を散らされんとしていた。

「エ工腫になつとるなア……くひひ、初めてなんやろ」

桑太は巴の口から指を抜き、右乳を鷲つかんできた。思いきり握って、充血した乳暈を乱れ咲かせると、

「くひひ、とつくり堪能させたるによつて、骨身に刻み込んだくんやでえ。巴はんに初めて、女の想いを遂げさせてヤッたんは……」

力いっぱい吸い立ててくる。

「あーっ、ああーっ」

躰がグシヤグシヤにされるような脱力感。腹の肉が、けたたましく笑っていた。

「……肉の覆りを仕込み、悦びを躰てやったんは……」

桑太は羽箒を置き、股繩をつかんできた。裂け目の尖りを挫くよう、思いつきり繩噛みさせてくる。幾本かの恥毛が股繩に絡みつき、縮れを伸ばしていた。

「……この桑太さまやかなア」

乳首を柔らかく、白玉を千切るかのように甘く噛まれた。繩を思いつきり、地引網を巻くかのように引き上げられた。双つの尖りに対する極めが、

(……ひい、ひうあ……う……嘘だっ……う、うそっ)

心身の操り糸を切っていた。裸形に剥かれた魂が、どうしようもなく灼熱していく。

「あーっ、だっ、だめえっ、ああ……」

躰が勝手に、踵を浮かせて逆エビ反った。浮遊感が、菌茎にまで沁み込んでくる。迸りの蜜が会陰部にまで滴り落ち、後ろの肉蕾まで濡らしていた。

「……だめっ、だめだめだめえっ」

背骨の弧が、橋桁を外されたみたいに崩れた瞬間。

「あああーっ」

初めて、だった。

くノ一になつて、巴は初めて果てさせられていた——女の無力さを心底、涙が出るほど仕込まれたのだ。受け身の余韻に浸る間もなく、立て続けに腰を振らされる。

「乳首っ、あああっ、ちくっ、ちくびいっ」

指一本すら操れぬ、心を鎮めることすら叶わぬ。望まぬ性交のなかに溺れさせられ、巴は助けを叫んで嘆き喚いた。だがその慟哭に応えたのも、股座の洪水と心奥の眩暈だけだった。粘膜の内側で、奔流が暴れている。胸のなかで、極彩色が乱舞している。

「あーっ、ああーっ、あああー……」

底抜けしていくような溜め息。桑太の淫戯が終わるまでの数刻、巴はしこたま「女」を貪らされていた。

「くひひ、可愛いなァ……冷たい面構えしとるけど、巴はんってホンマ、エエ声で哭くんやなァ……可愛い、ああ、可愛いなァ」

可愛い——百花として咲いてからは、全くかけられなくなった言葉だった。更に、童女を相手にしているかの如く凝視される。

「……あ、ああああ……あう、あつ……あうう」

激震し続けている胸のなかで、何だろう、不思議な情念が湧き上がってくる。奇妙な懐かしさを感じさせるこれは、恐らく、恐らく屈辱だ。屈辱に決まっている、そうでなければならぬ。

上手く回らない頭を焚きつけ、巴は狂ったように決めつけた。己はくノ一であり、畏れられるべき女である。だから「可愛い」と言われても悦ばぬし、受け身になるなど望まぬ女としての昇天など欲しくもない。先ほどのように、心身の緊張を余さず搾り尽くされたいなんて——あれを再び、味わいたいなんて——思わない、思うはずがない。決してない、断じてない、絶対でない。

「どうや、股座の奥うが……寂しいやろ。寂しくて切のうて……儂のが欲しいやろ」

弱々しく震えている間に、鎖帷子まで剥ぎ取られていた。唾液と生汗にまみれた双乳が、呼吸に合わせてブルブルと揺れる。乳房の付け根が、甘痒く感じられて仕方がなかった。眉間に縦皺を刻みながらも、巴は反駁はんぱくを搾り出していた。

「……ほ……しくなど……な、い……」

「ほうかア……そろそろ、かなア」

間を置かずして、巴の股間が爆ぜた。

「……………」

巴は再び、背骨が鳴るほど仰け反っていた。あまりに勢いが乗りすぎたせいか、腹に抱きついていた桑太まで振り飛ばしてしまう。

「ひいっ、いあ、あつ、あぐ、あおあつ」

「おっほ……くひひ、始まりおったなア」

下卑た嘲りにも、全く気づけなかった。逆エビのまま右に倒れると、今度は順エビ。躰を丸めて足の付け根を押さえ込む。

そこは勿論、爆ぜてなどいなかった——そこには、炎ではなく「海」があった。ドロドロに茹^ゆだつた恥蜜が、垂れ流しのようにこぼれている。濃^{こま}やかすぎる臭いは、当人ですら恥ずかしくなるほどだった。

「……壺憑はんは、一日で三回い、毒う吐くんよ。しかも段々、効き目強うしていくんや。ハラ減つて、怒つてんやろなア……どや、前のは比べ物にならんやろ」

応えられなかった。秘処を押さえ、巴は鋸^{もり}でも突き刺されたみたいに転げ回っていた。

飛び散る体液。炎で炙られた白蛇よろしく、痛々しいまでに悶え狂う。

(ああおア、な…流つ、がああ…流さ、れるうう)

七転八倒。敷き藁や後ろ髪に触れられるだけで、巴は感じて乱れて流された。

「このまま放つといたら…悶絶地獄や。頭も軀も、ドロドロに呆けるでえ。巴はん、あんたまだ、女としては初心者なんやから…」

巴は俯せうつぶせになって、股座を驚づかんだまま腰をガクガクさせていた。凄腕のくノ一だったとは信じられぬほど、それはあさましい喘ぎ姿だった。

「…このまま耐え続けんのは無理やろ。黙って、儂の精をおねだりしといた方が…エエと思うがなア」

「あぐあ…ああ、おおあ…い、いや、だ…」

突き出し気味の美尻。その皺沼に、桑太が中指を差し込んできた。

「…おほおおっ」

皺が伸ばされていく折の、緊張をたたえた弛緩。指に潜られた際に弾ける、妙な達成感。

「っほあああ、へああ…だっ、だめっ、っああお」

此度は呆気なかった。卵が割れるよりも脆い葛藤の後、巴は肉の転覆と心の翻弄——女としての屈伏を晒していた。

「ほれ、この有り様や。ココで儂が、思う存分責め廻つたら…どうなるんやろなア」

くちっ、ぬちっ。指がかすかに、脅しをかけてくる。

「ほおああ……だ、つくあ、つめ、それっ、だめえ……」

「ほうかア、ま、ヤメてもエエけどな……」

桑太はやけに物分かりよく引き、

「……けどなア、そろそろ最後の毒吐き……いちばん濃ゆいのが始まる頃やないかなア」

巴を芯から凍りつかせた。

「餌ア与えれば……くひひ、吐いたりせんのをやけどなア」

「……くうあ……あああ……つうああ……」

あからさまな誘いにも、巴は恐れ戦くことしか出来なかつた。此刻より凄まじい欲業、それに子壺を満たされてしまったら。

「巴はん……なア、欲しいんやろ」

「あ……っ……がひ……いらなあ……ひい……いらな、いつ」

項を一舐めされ、巴は悲鳴を漏らしていた。

「甘い肌味やなあ、くひひ……どや、欲しいやろ」

「……ひい……っぐ……ぐひい……ひ、いら……ない……」

「くひひ、なに言つとるか分からんで」

桑太はワザとらしく笑い、

「ほな、こうしよか。巴はんがホンマに欲しくないんやったら、仰向けになつてえな」

「……ひ、ひっ……ひきつ、きよう……も、ものお……」

此刻の巴にとつて、寝返りを打つことですら苦行である。桑太の提じてきたそれは、無理以外の何物でもなかった。つまるところ、巴がどう応じようと犯すつもりなのだろう。

「どうしたんや……仰向けにならんのかア」

膝の裏をつかまれた。グイッと割り広げられ、胴と腿が垂直になるよう、腿と脛が直交するよう押し上げられる。開脚しかけたカエルの態。続いて、舟底護りの指を除けられた。

「つまり……くひひ、欲しい、つてコトやなア」

「つおあ……あ、つくあ……ち、ちっ、がうう……」

「……ほうかほうか、くひひ、違うかア」
ずぶぬっ。

「……うひっ」

秘なる唇が、亀頭の尖端で寛げられていた。

「違うんかア、ほうか、欲しくないんかア」

ずにゆり・ぬにゆり、と浅瀬を掻き混ぜられる。

「ひいーっ……つあ、ああつ、つおおあ……」

頭を抱え、叫びたかった——野太い。その体軀に似合わず、桑太のモノはそれほどの存



在感だった。

「欲しくないんやなア……そうなんやな、巴はん」

ぬぶぶつ、ぬぶつ、ぶぶぬぶぶぶつ。

「あひい、ひいあお……おひいおあ……つおおあ……」

柔肌のすぐ下に、男の肉棒が聳そびえているようだ。「我」という有り様は、ただの薄皮にすぎなかったのではないだろうか。巴は本気で、そう思い込まされかけていた。

「ほうか、欲しくないんか」

「……おああ……ほつ、ほし、くなつ……なひい……」

「ほうか……まア、そういうことにしといたろ」

桑太はゆっくり、異様にゆっくり、と極太を潜らせていく。挿入の味を恥骨にまで刻み込もうとしているかのような、実に偏執的な突きだった。

「……おおおつ、お、おおあ、つあ、あ……」

耐えられる、はずがなかった。小屋のなかを、否、隠れ里を煮立たせてしまいそうなほどの獅子吼。

（あああつ……たつ……た、たまつ……しひいがあ……）

たった一突きだった。それだけ、ただそれだけで、淫術の遣い手が覆されていた。巴はあつさり、

「……あーっ、はっ、果てっ」

果ての果てまで翔とばされていた。間髪入れずの引き抜き。恥垢を掻き集めんとしているかのような鈍さで、桑太に一往復された瞬間、

「おああーっ」

巴の魂は、昇り詰めた天すら突き破っていた。

「あーっ、ああーっ、あー……」

舞い降りてくる気絶。肉の穿うがちを味わった秘唇だけが、ヒクヒクと微痙攣を続けている。「他愛ないのう。薊はもう少し堪えおったぞ」

困惑げに言うと、桑太は肉棒を引き抜いた。巴を抱え、部屋の隅まで運んでいく。

「まあ、エエ。主従共々……極上の飼娘に躑たるさかいなア」
笑い声が反響していった。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>